第42回
青森県少年の主張大会報告書

青い雲

主催　：　青少年育成青森県民会議　国立青少年教育振興機構

目　次

■ 第４２回「青森県少年の主張大会」概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P２

■ 主催者挨拶・・・ P３

■ 来 賓 祝 辞・・・ P４

■ 発　　表・・・ P５〜P12

■ 講評(要旨) ・・・ P13

■ 第４２回「青森県少年の主張大会」実施要綱・・・・・・・・・・・・・・ P14

■ 講演(要旨) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P15〜P16

■ 紹　　介

第４２回少年の主張全国大会〜わたしの主張 2020〜・・・・・・・・ P17〜P22

・内閣総理大臣賞受賞作品

・文部科学大臣賞受賞作品

・国立青少年教育振興機構理事長賞作品

・審査委員会委員長賞作品

・審査委員会委員長賞作品

・審査委員会委員長賞作品

第４２回「青森県少年の主張大会」概要

■次　第

１　開　会

主催者挨拶	青少年育成青森県民会議会長	橋本　都
来賓祝辞	むつ市長	宮下　宗一郎

２　発　表

言えない自分	青森市立南中学校	３年　松山　風音
将来に向けての第一歩	風間浦村立風間浦中学校	１年　五十洲　ひなた
自信	八戸市立是川中学校	３年　工藤　小陽
青い空	むつ市立田名部中学校	２年　宮古　萌生
どぶ	階上町立道仏中学校	２年　石橋　華七子
えんぶりがつなぐもの	八戸市立是川中学校	３年　木村　莉緒
この町に出会って	むつ市立田名部中学校	２年　大畑　凪央
私の幸せ	今別町立今別中学校	３年　横岡　奈子

３　講　演

「若者よ“ご縁”をつかめ！」

講師　フリーリポーター　　中島　美華　氏

４　表　彰

最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞５名

５　講　評

青少年育成青森県民会議　青少年専門指導員　坂本　徹

６　閉　会

■審査員

青森県ＰＴＡ連合会	副会長	大見　竜人
青森県中学校長会	幹事・研究委員長	神　和宏
青森県青少年・男女共同参画課	課長	工藤　亨
青森県教育庁学校教育課	総括主幹	黒滝　和代
青少年育成青森県民会議	青少年専門指導員	坂本　徹

主催者あいさつ

青少年育成青森県民会議
会長　橋本　都

皆さん、こんにちは。
第４２回青森県少年の主張大会の開催に当たりまして、ご挨拶申し上げます。

本日は、むつ市長の宮下宗一郎様はじめご来賓の皆様には、新型コロナウイルス感染症対策など大変お忙しい中、本大会にご臨席を賜りまして、まことにありがとうございます。

この大会は、昭和 54 年の「国際児童年」を記念し開催され、これまで数多くの中学生や大人が参加し、中学生の皆さんからたくさんのことを学んできた大会であり、毎年順繰りに県内各所で開催しております。

少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける成長が求められています。

そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切です。

少年の主張大会は、これらの契機となることを願い実施するものです。

本日は原稿審査で選考された８人の中学生が様々なテーマで主張発表を行います。中学生の皆さんがどんなことを考え、どんな意見を聴かせてくれるのだろうと大変楽しみにしています。

大会に参加していただいているむつ市立田名部中学校の生徒の皆さんにも、ぜひ発表を聴きながら、「自分ならどう考えるんだろう。自分ならどういう行動が取れるのだろう。」と自分自身に重ね合わせて、様々なことを考えていただければと思います。

また、本日は主張発表の後に、フリーリポーターとしてご活躍の中島美華さんに「若者よ“ご縁”をつかめ！」と題したご講演をいただくこととしています。

中学生は、小学生時代とは違い学習内容や活動範囲が広がり、広く地域のことについて学び、スポーツや課外活動に打ち込んでいることと思います。また今年は特に新型コロナウイルス感染症によって社会のこと、家族のこと、友達のことを深く考えた人が多いのではないかと思います。中学校の３年間は、多様な人々との関わり、つながりの中で自分を形づくり、心身ともに大きく成長する、人生の中でもかけがえのない時期です。この大会がいろいろ考え行動する機会につながることを期待しています。

最後になりますが、新型コロナウイルス感染症対策の中、会場校として様々な準備をしていただいた田名部中学校の和田校長先生、教職員の皆様に感謝を申し上げ、あいさつの言葉といたします。

来賓祝辞　むつ市長

むつ市長　宮下　宗一郎

第４２回「青森県少年の主張大会」が、このように盛大に開催されますことを心よりお喜び申し上げますとともに、関係者の皆様に対し、心から感謝と敬意を表したいと思います。

まず、生徒の皆さんに、人が成長するために大切な３つの要素について、私の考えをお話します。１つ目は、本を読むこと。２つ目は、旅をすること。３つ目は、人の話を聞くことです。

１つ目の本を読むということは、過去の様々な人たちの経験を得ることができます。

２つ目の旅をするということは、風景や景色、そして食べ物を通じて今世界がどのような状況であるかを知ることができます。

そして３つ目の人の話を聞くということは、人の話を聞き、自らの行いを省みることにより、よりよい未来を構築することができます。

したがって、私は人が成長するための３つの要素、本を読み、旅をして、人の話を聞くことがとても大切だと、自分自身にもよく言い聞かせています。

そして、今日は３つ目の要素、話を聞く場として、皆さんの代表８名が同年代の皆さんの前で、自らの考えを主張します。聞き手の皆さんは、心の中で大いに共感し、反論してみてください。そのことが、皆さんの新しい未来を築く大切な成長のきっかけになると思います。

せっかくの「少年の主張」ですから、私も１つ皆さんの前で主張します。皆さん、今日の「少年の主張」という表題について疑問に思いませんか。少女はどうなるのでしょう。この大会は私が生まれた昭和５４年に始まりました。今から４１年前ですので、今ほど男女平等が考えられなかった時代かもしれません。もちろん、少年という言葉の中には、少女が含まれる場合もあります。たとえば、「少年老い易く学成り難し」。この言葉の中の少年はあくまでも「若い人」という意味であり、それには男子も女子も関係なく使用されています。また、「少年院」という施設の「少年」にも男女の区別はありません。しかし、私はぜひ、特に今日参加されている女子生徒の皆さんに、例えば「中学生の主張」「少年少女の主張」「少女少年の主張」というものを今後実現してほしいと、市長ですが、あえて言わせていただきます。きっとそのことが皆さんの新しい未来、そしてこの大会の未来を築くことになるのではないかと思います。

最後に、今日の大会に向け、一人ひとりが練習を一生懸命頑張ってきたと思います。自分自身の心の中の言葉をすべて出し尽くし、ここにいる皆さん、そして教室で聴いているすべての田名部中学校の皆さんが大いに共感し、反論し、一歩でも成長してくれることを期待し、私からのご挨拶とさせていただきます。

【最優秀賞】

私の幸せ

今別町立今別中学校　３年　横岡　奈子

「はあ。またできなかった。」
私は、祖母の入居している施設を出てすぐ、深いため息をついた。

私の祖母は、アルツハイマー型認知症という病気で老人ホームに入居している。祖母は何度も同じ話をするし、わがままもたくさんする。そんな祖母の前で私は、作り笑いをするのが癖になってしまっている。作り笑いをして楽しそうにしていると、祖母の機嫌が悪くなることもなく、場の雰囲気が悪くなることもないからだ。

でも私は、作り笑いをしている自分が大嫌いだ。本当の祖母から目をそらし、都合のいい自分だけを見せているようで罪悪感がある。もし今、急に祖母と話をすることができなくなっても、そんな自分に満足できるのだろうか。こう思うようになったのは、祖父の死が関係している。

私は幼いとき、祖父がとても怖かった。背は高く、いつも険しい顔をしているし、何より無口なところが一番怖かった。何を考えているのか分かりにくく、必要なことだけを津軽弁で簡潔に言うので、余計に怖かった。だから私は、祖父にあまり近づこうとしなかった。

そんなある日、祖父が掃除をしていたとき急にくるっと向きを変えて、電源が入ったままの掃除機を向けてきた。幼かった私は、掃除機の音が苦手だったのもあり、怖い祖父が苦手な掃除機を私に向けてくるのがただ怖くて大泣きしてしまった。祖父はすぐに祖母から叱られ、ふてくされぎみだった。そんな祖父の姿を見ていて、ある疑問が浮かんだ。私に掃除機を向けてきたときの祖父は、とても嬉しそうな顔をしていたからだ。その顔は、人をいじめるときのような「嫌な顔」ではなく「優しい顔」に思えた。

「あの嬉しそうな優しい顔は何だったんだろう。」

そんな祖父は、私が小学校二年生のとき、肺炎で急に亡くなった。思ってもいなかった祖父の死。私にとって初めての身内の死。遺体となって帰ってきた祖父は、あんなに威勢がよくて怖かったのが嘘のように弱々しく見えた。自分にとって大切な人がいなくなってしまうことがこんなにもつらくて寂しいことだと、このとき初めて知った。

家族や親戚との会話が祖父の思い出話でいっぱいになり、私は、祖父が思っていたよりもずっと優しくて、かわいい人で、すごく不器用だったことを知った。祖父の意外な面を知ったばかりの頃は半信半疑だったが、今ならよく分かる。祖父は何度も私をかわいがってくれていた。掃除機を嬉しそうに向けてきたのだって、私と遊ぼうとしてくれていたんだ。それが祖父なりのかわいがり方だったのだ。

「不器用すぎるよ、じっちゃん。今優しさに気付いても、もうお話できないんだよ。もう遊ぶことだってできない。」

祖父の真実を知った私は、すごく後悔した。そして、本当の祖父の優しさに気付けなかった自分を愚かだと責めた。

あれから７年がたち、今私は病気の祖母と向き合っている。祖父のときのように、いなくなってから後悔するようなことはしたくない。祖母がわがままを言ったとき、本当は作り笑いをするのではなく、心からの笑顔で最後まで話を聞き、祖母の希望を叶える私でいたい。もしうまくできなくても、最善を尽くしたことを祖母はきっと、喜んでくれるはずだ。祖母が笑っていると私もうれしい。祖母が幸せでいることが私の幸せなのだ。

本当に大切な人を大切にするということはうわべだけの当たり障りのない関係でいることではない。相手のことを知ろうとし、本当の自分をさらけだし、今目の前にいる人を正面から受けとめることなのだ。私は大切な人を大切にできる人になりたい。相手の幸せを心から願える人になりたい。そう思いながら、祖母と過ごす一日一日を大切に生きている。

【優秀賞】

言えない自分

青森市立南中学校　３年　松山　風音

「自分の良いところを挙げてください。」この質問に対して、即座に、いったいいくつの良さを自分で挙げることができますか。

欧米の中学生たちに同じ質問をすると、迷うことなく、自分の良さを次々に語り始めるといいます。さらに「一番魅力的な人は誰か」という質問をすると、そこにいる全員が一斉に、「イッツミー！」と、自分こそが魅力的であると言い張るのだそうです。これには強い衝撃を受けました。

私は今、学級会長を務めています。会長に立候補した理由は、人前に立つことにあまり抵抗なく、「自分ならできる。」と思っていたからです。

運動会でクラスをリードしたり、話し合いの場で司会をしたりなど、自分の役割を果たすため、さまざまな場面で動いてきました。その中で、「言えない自分」というものが、自分の中にあると気づき始めました。

「言えない自分」とは何か。

例えば、授業前、二分前着生を呼びかける際に周りの目を気にして声をあげることをやめたり、「クラスであんなことをしたい」と企画を考えても、みんなはどう思うだろうと思い悩んでやめてしまったり・・・。授業中、考えはあるのに間違いを恐れて挙手しなかったり・・・。「言えない自分」は、私にとって発言や行動を妨げる邪魔者になると思いました。

では、どうすればそんな「言えない自分」を自分の中から追い出すことができるのでしょう。私は、自分をもっとオープンにすることがそれにつながると考えました。自信をより強くもち、さまざまなことにチャレンジするのです。冒頭でお話しした、自分は魅力的であると答えた中学生は、自分に自信をもっているから、自分は魅力的だと言えるのではないでしょうか。

そして、より自信をもつには、自分の良いところを見つけ、それを自分で認めることが大切だと思います。自分はできる。上手にできる。その思いが自信につながるのです。

今の私は、自分は魅力的だと言えるような自分になることはできていません。しかし、「言えない自分」を追い出すために、「自分の考えたことを堂々と誰かに伝える」というチャレンジを今ここでしています。このチャレンジを通して一層高まるであろう私の自信を、これからの生活に役立てていきます。

最後に、私がみなさんに伝えたいことは、クラスの仲間や先生、友人・・・周囲の人たちに対してもっと自分をオープンにするべきだということです。みなさんの中に「言えない自分」はいませんか。発表しようと思っていたけれど、怖じ気付いてしまい、誰かがやってくれるのを待った、なんていう経験をしたことはありませんか。意見を伝えることに抵抗を感じてしまうのです。せっかくもった考えが、自分で蓋することでお蔵入りになってしまうのは、非常にもったいないことだと思います。意見を寄せ集め、新たなものを生み出すことは、さまざまな場面で活用されますし、同時に楽しさを感じられるのではないでしょうか。だからこそ私は、自分に自信をもった上で、自分をもっとオープンにし、何事にも積極的な自分を目指します。そして、自分は魅力的だと言えるような自分になりたいと強く思います。

あなたは、どう思いますか。

【優秀賞】

えんぶりがつなぐもの

八戸市立是川中学校　３年　木村　莉緒

「春の始めに福大黒は、金をどっさりと持って舞いこんだやあ。ほら一つとせ。」この口上を聞くと私の胸は高鳴る。大黒様が幸せを届けているのだ。にこやかに踊るその姿は私を夢中にさせる。八戸は２月の中旬、１年の豊作を願うため土の中にいる神様を呼び起こすえんぶりが行われる。私はこの大黒舞を見るたびに、自分も踊りたい、えんぶりに参加したいと思うようになっていた。

ある日、その夢が叶った。小学校六年生の時、学校に妻ノ神えんぶり組の代表である馬場さんがいらっしゃったのだ。えんぶり組に参加したい人を募集すると聞いて、すぐに参加することを決めた。小さい頃からずっと見てきたえんぶりを今年からは踊れるようになる。考えただけでとても嬉しかった。

練習初日、私が教わったのは「金輪切り」という演目だった。七つの金輪を使って、さまざまな形をつくっていく。「みんな笑顔でやっているんだから大丈夫。」私にもできるだろうと思っていた。実際にやってみると想像以上に難しかった。覚える形も口上もたくさんある。そして周りのみんなのペースに合わせなければならない。「できないかもしれない・・・。」一気に不安が襲ってきた。

初めておはやしに合わせた日。みんなについていくことだけに必死になっていた。途中から追いつけなくなった。自分だけがあせりながらつくる中、みんなは

「はあ、変わりますれやぶんぶく茶釜かまんぷく茶釜か、これに口先つかないばかり。」

とどんどん進んでいってしまった。このように遅れてしまうことが毎日のように続いていた。それでもえんぶり組のみなさんは

「今日良がったよ。」

「見ている人さ見やすい高さでやれば良いんでねえがな。」

と声をかけてくださった。私はみなさんのおかげで、初めてのえんぶりをやり切ることができた。

えんぶりに参加して三年がたち、私は、「金輪切り」と「大黒舞」を踊っている。何度も練習をするうちに自然と笑顔で踊ることができるようになっていた。馬場さんも

「妻ノ神えんぶり組の大黒舞は良い笑顔で踊るよ。」

といろいろな場所でおっしゃってくださった。

期間中、ある老人ホームでえんぶりを披露した。大勢のおじいさん、おばあさんが

「いやあ、めんこいな。」

と声をかけてくださった。すると、馬場さんが一人のおじいさんを紹介した。その方は妻ノ神えんぶり組に大黒舞を伝えてくださった方だった。えんぶりをずっと続けたい、守りたいという思いが伝わるお話だった。私はその方の前で大黒舞を披露した。これまでえんぶりをつなげてくださったことへの感謝の気持ちでいっぱいになり、いつもよりさらに熱のこもった踊りになった。踊り終わるとその方は泣いていらっしゃった。それを見た馬場さんも泣いていらっしゃった。私の胸も熱くなった。

えんぶりは豊作を願うだけでなく、人と人との絆を深めてくれるものだと思う。踊ることで見ている人とつながる。この文化を伝えることで未来の人につなげている。たくさんの人がこのえんぶりを守り続けてきたから、今私は踊ることができるのだ。自分の住む地にこんなにも素晴らしい文化がある。そのことに感謝して、これからも踊り続けたい。

【優良賞】

将来に向けての第一歩

風間浦村立風間浦中学校　１年　五十洲　ひなた

私は、人や動物、本との出会いを通して、物事の見方や考え方、生き方が大きく変わったように感じています。

私がまだ幼いころ、家族で買い物をしていた時のことです。若い女の人が、犬を連れてお店の中を歩いているのを見かけました。犬が苦手な私は、姉の後ろにかくれながらも、ずっと見続けていたことを今でも、ハッキリと覚えています。（吠えるかな。かみつくかな。）私は、そばにあったトマトを買うふりをして、犬の背中についている名札をジロジロとのぞき、近づこうとしました。離れて見失うと今度は、テレビドラマの刑事さんの真似をして、気づかれないように尾行までしたのです。今思うと、不審で迷惑な行動であり、なぜあんなことをしたのか、はずかしくてたまりません。当時の私は、お店の中に犬がいるということに、ただただ興奮していたのだと思います。しかし、後にその犬の存在が盲導犬であるということを知り、盲導犬のことや盲導犬を必要とする人のことを調べました。

思い返せば、確かに当時の私のような幼い子どもの前や賑やかなお店の中でも、盲導犬は本当に静かで大人しく、堂々としていました。そして、パートナーである二人は、人間と動物なのですが、お互いに支え合っていると感じました。人間と犬が心を一つに共同作業をしていることに、ほっこりとした嬉しい気持ちになりました。

私はこの出来事をきっかけに、障害のある人について少し気にかけるようになりました。そして、この後さらに大きな出会いが待っていたのです。それは、障害のある子とその家族の成長についての本です。私は、その本から多くのことを学びました。特に強く心に残っていることは、二つあります。

一つ目は「親の大変さ」です。障害のある子の親も、そうではない親も子育ては、もちろん大変でしょう。しかし、障害を持つ子の親は、一般的な子育ての何十倍、何百倍もの壁にぶつかり、またその壁を乗り越えているということを知りました。中でも、障害を持っているということに、いつ気がつくかによって大きく変わってくるようです。それには、家族皆の協力と支えが必要であると感じました。

二つ目は「周りの人の対応」です。障害のある主人公の少年とその同級生が、学校でも、休日でも仲良く遊んでいました。私は、この場面から、自分も同じように障害のある子と気軽に遊べるのだろうか、と考えさせられました。（かわいそうだな、苦しそうだな。）という気持ちが先に立ち、うまくコミュニケーションを取れないのではないかと思います。けれどそれは、私自身の経験や知識の少なさからくるものだと感じています。

これらのことから、私は将来、障害のある人やその家庭の力になる仕事をしたいと思っています。今はまだ、障害に関することは興味としての入口に立ったばかりですが、少しずつ学んでいきたいです。将来の夢を叶えるための今の目標は、「障害のある人について理解し、共に生きるために温かい心を持つこと」です。障害があってもなくても、みんなこの世界に生きるかけがえのない大切な命です。お互いを信じて、思いやりを持って接していけば、必ず思いが届くのではないでしょうか。しかし、人の心は弱いです。意地悪な心、残酷な心、欲張りな心など誰しもが持っています。私は、自分の中の温かい心を日ごろ活かせているのか自信がありません。そのため、いつでも相手の心を思いやり、行動できるように努力することが課題だと思います。そして、この気持ちを忘れずに、将来につなげていきます。

【優良賞】

自信

八戸市立是川中学校　３年　工藤　小陽

「今回の大会さぁ、不安なんだよね。」

「そんなこと言うくらいの気持ちで出るんなら、大会なんて出ないほうがいいよ。」

母のその声は、静かだったが、こちらが怯んでしまうほどに怒っていた。

平和な日々を送る私の悩みは、自分に自信が持てないことだった。大会の前など、一人でいると自分には無理かもしれない、何か忘れ物をするかもしれないと、どんどんネガティブになってしまう。

そんな折、不安を漏らした私への母からの反応は、怒りだった。冗談めかした発言にそんな反応を返された私は戸惑うと同時に、反発を覚えた。

「不安なんてみんな持ってるし、それを吐き出すからすっきりするんじゃん。そんぐらい分かってよ。」

そうではないのだと、母は言う。言葉は自分が一番聞いているのだから、自分で言ったことを脳はそう思い込む。小陽は今、自分で自分に、私にはできないと刷り込みをかけているのだよと、そう続けた。

それに言い返すと長くなりそうだったので私は黙り込んだ。だが、それでも不安なものは不安なのだし、謙遜するのは日本の文化ではないのかと、より強く反発していた。でも、母の「言葉は自分がいちばん聞いている」という言葉が、頭にこびりついて離れなかった。

しばらくして、長い間お世話になっている知り合いと４つ上の姉の話をした。それをきっかけに思い出した。姉が辛いとか不安だとか、そういった弱音を吐いているのを見たことがない。頭に浮かぶ姉はいつだって自信満々で、不安など少しも見せない。

不意に、この前の母との会話が頭をよぎった。会話の内容と普段の姉とを頭の中で何回か繰り返し、ショックを受けた。私は「謙遜」するつもりで自分を「卑下」していたことに気づいたからだ。

「謙遜」にも「卑下」にも、「へりくだること」という意味がある。でも、「謙遜」には、自分の能力を認めた上で相手を立てる、というニュアンスがある。自分を過小評価するのとは全く違う。

また、私は不安を口に出すことで、上手くいかなかったときの逃げ場を作っていたことにも気づいた。そうしておけば、できなかったときの言い訳は容易い。

それに気がついたとき、自分が情けなく、そして恥ずかしかった。勝負の前から逃げているに等しいことをしていた。こんな真似は二度とすまい、そう心に誓った。

それから私は、前向きな言葉を言うようにしている。何回チャレンジしても上手くいかないときに、不安で何もかも嫌になったときに。私にはできる、その一言で少しだけ自信が出てきて、何とかできるような気がしてくるのだ。

不安なときに、目を閉じて、大丈夫、できる、と唱えることを繰り返すうち、だんだんポジティブになってきた。母の「自分の言ったことを脳は信じる」という言葉は本当だった。また、ポジティブなことを考えているときは調子が良くなることも実感した。

いつでも自分に自信があるかと問われれば、正直、答えられない。不安が大きくて、すべてを投げ出して膝を抱えたくなることが、時折ある。

でも、その問いに、もちろん、そう即答できるようになる日がいつか来る。そう信じて、私は今日も呟く。

「大丈夫だよ。きっとできるから。」

【優良賞】

青い空

むつ市立田名部中学校　２年　宮古　萌生

「親友って、いる？」
何度か聞かれたことがある。皆さんにとって親友ってどんな存在ですか？

広がる青空。でも、その日の私には、曇って見えた。学校の玄関には新しいクラス表。私には親友がいる。ずっと同じクラスだった。もしその子と違うクラスになったらどうしよう。怖い・・・。でも、新しいクラス表を見た瞬間、今日が青空であることを思い出した。急いで教室に向かいドアを開けた瞬間、親友の笑顔が見えた。私達は窓際の席。外を見ると何も混ぜない青色の絵の具でかいたような空がどこまでも続いていた。

新学期が始まる。毎日の学校は楽しかった。でも、その状況はいきなり終わる。朝、教室の机の上に大量のプリント。
「コロナウイルス感染予防のため、これからは分散登校になります。」
先生の言葉に教室はざわついた。私は、親友と違う登校日になった。たった十日間だけれど親友と一緒に学校生活を送れないのは初めてで、不思議で、不安だった。

会えなくなると、ＳＮＳなどで頻繁に連絡をとるようになった。相手の表情も仕草も喋り方も、こんな小さな画面では、全然分からない。ある日、ちょっとしたやり取りの中でぶつかってしまった。本当に小さなことだった。長い付き合い。お互いのことはよく知っているつもりだったのに。会えない時間が長くなるだけでこんなにもすれ違ってしまうのかと驚いた。ちゃんと会って話していれば、こんなことにはならなかったと思う。空はまた、曇り空に覆われていた。

毎日の学校生活の中で、一緒に授業を受け、遊んで、笑って、でも時にはケンカし、悩むこともある。友達、ライバル、仲間。この関係を一言で言い表すのは難しい。私達は多分、相手に関心を持っているから、言葉を届ける。その結果、ぶつかり合うこともある。相手のことを信用しているほど、相手の言葉が胸に突き刺さるし、自分のことをどう思っているかが不安になる。

もう一度、皆さんに質問したい。皆さんにとって親友って、どんな存在ですか？

私にとっての親友とは、たとえぶつかり合うことがあったとしても、それでも一緒にいたいと思える人のことだ。分散登校が終わり、私は親友と仲直りすることができた。

もし皆さんがこれから、自分の友達とぶつかった時には考えてほしい。「それでも一緒にいたい」と思えるか。誰も完璧な人間なんていないから、長所も短所もある。あなた自身、完璧な人間ではないはずだ。だからこそ、そういう短所も含めて、「それでも一緒にいたい」と思えるか。そう思えるのならそれが「親友」なのだと思う。

今回の休校を通して、毎日友達と会える楽しさや、実際に会って話す大切さを知り、改めて学校というもののありがたさを感じた。

私達の心は、自分次第で青空にも曇り空にも変えることができる。私は願う。青い空の下、ずっと笑顔でいられることを。

【優良賞】

どぶ

階上町立道仏中学校　２年　石橋　華七子

あなたは、辛くて逃げ出したくて、泣きわめいたことがありますか。

たまたま背負いこんでしまった、やらなければいけない負担や責任に、押しつぶされそうになったことが私にはあります。その負担や責任に負けてしまうことを、私は「どぶ」と名づけました。

私は去年、中学校一年の頃、そのどぶにはまりました。きっかけは「何とかなるかな」と思って引き受けたピアノの伴奏者でした。「夏休み中に頑張って練習したら大丈夫」と自分に言い聞かせて練習を始めてみたものの、それは思い描いていたように進みませんでした。音楽の先生は、夏休み中も上達するように教えてくれました。家でも必死になってピアノと向き合いました。しかし、いくら弾いても、なめらかに弾けるようにはなりませんでした。

合唱コンクールはどんどん迫ってきます。焦る気持ちと現実の狭間で、頭の中がぐちゃぐちゃになりました。「どうしてこんなにバカなんだろう」と、自分をなじり、地の底まで落ち込みました。実際に、はまった経験がある人はわかると思いますが、「はまった」こと自体がショックなのです。「醜悪のるつぼのどぶに、今私ははまっている。」とパニックになり、我を失ってしまうのです。

私は結果的に、そのどぶからはい上がりました。それができた理由の一つは、「時間」です。どぶにはまったことは、もちろん最悪の事態でしたが、私の内面では解決に向けての模索が始まっていました。

まず、どぶの中でばたついた後で、ひとまずその動きを止め、周囲の状況を確認しました。そうすると不思議なもので、どうやったら抜け出せるのか、何が必要なのかが、少しずつ考えられるようになりました。「一人で考え込んではいけない。信用できる人に話してみよう。」と解決の糸口にも気づきました。自力では無理でしたが、信用できる人に手を伸ばし、手伝ってもらうことで、何とかその地獄から抜け出せたのです。

しかし、どぶの恐ろしさははい出しても続きます。体はどぶにはまったままの姿です。強烈な汚れや臭いが付着しています。とてもそのまま過ごせるものではありません。必死に自分自身を洗います。これが反省です。何が悪かったのか、これからどうすればいいのか。きれいさっぱり洗い流し、思考を整理するのです。これをすることで、二度と同じどぶにははまりません。もし仮にはまりそうになったとしても、経験を活かし、はまりきらずに抜け出せるのです。

私は合唱メンバーの一人としてコンクールに臨みました。ほろ苦い経験でしたが、今考えるとそれが最善だったと信じています。

「歳月は人を待たず」という言葉があります。与えられた時間の中で、人は生きる道を探します。私のこれからにも、さらにいろいろなどぶが待ち受けていることでしょう。しかし、たとえそのどぶにはまることがあったとしても、もう一人きりで悩むことはしたくないと思います。

これからの私は、どぶをむやみに避けるのではなく、そのどぶの意味をはい出た先を、家族や周りの方の手を借りながら懸命に考えていきたいです。

【優良賞】

この町に出会って

むつ市立田名部中学校　２年　大畑　凪央

正直、嫌だった。今まで住み慣れたあの町を、離れたくなかった。

一日も休まず通った、学校。週末に母と出かけたスーパーマーケット。弟が生まれた病院。あの町の、全部が大好きだった。

小学四年生の冬の日。あの町を離れることになった。親の仕事上、いつかはその時が来ることは分かっていた。でも、まさかこんなに早くとは思っていなかった。頭の中は真っ暗で、先のことなど考える余裕はなかった。最後の登校日。友達と別れることも寂しかったが、あの学校、あの町から「私」という存在がなくなってしまうことが嫌だった。私は自分の故郷を、失った。

新しい町での生活は、私の心配とは少し違った。新しい学校の、新しい友達は、みんな笑顔で私を迎えてくれた。でも、この町はまだ、私の居場所にはなっていなかった。

そんなある日、「ジオパーク」について学んだ。周りのみんなは、「またか」という感じだったが、私にとっては驚きの連続で、胸がドキドキした。尻屋崎、鯛島、恐山。本州の北端にあるこの町は、まるで宝箱のようだった。調べれば調べるほど、知らないことや美しい風景に出会えた。小さかった私の世界地図が、広がったように感じた。でも、この町について知り、この町を好きになっていくにつれ、あれだけ好きだったあの町の記憶がなくなり、あの町を故郷だと思う気持ちが少しずつ小さくなっていく自分が、すごく嫌で、苦しかった。この町を「好き」になることは、あの町への裏切りではないのか。そんな気すらしていた。

ちょうどその時、前の学校の友達から手紙が来た。「元気？」「会いたいね」手紙を読んでいる間は、あの頃の自分に戻っているようだった。そこで私は気がついた。私とこの子は、今でもちゃんと友達なのだということに。

窓から見えるのは、段々好きになってきたこの町の景色。手紙に同封されていた写真は、大好きだったあの町の景色。私はそのどちらもが、愛おしいものになっていた。

人は、つい「一番」とか「自分だけの」というものを決めたがる。皆さんにも、そのような経験はないだろうか。例えば、友達に対して、「一番仲良いのは誰？」と聞いてみたり、「私以外とは仲良くしないで、友達を取らないで！」と独占してみたり。でも、考えてほしい。「あれも好き」「これも好き」「みんな好き」では、いけないのだろうか。「一番」とか「誰々より上」とか、そんなに大事なことなのだろうか。私はそうは思わない。自分にとって大切な存在はたくさんあって良いし、好きな相手なのだから、その人の大切が増えることを、喜べる自分でありたいと思っている。

私には、故郷が二つもある。二つの町が、私を温かく迎えてくれる。私はこの町に来られて、本当に良かった。それは、大切なことに気づけたから。もし、どうしようもない別れがあったとしても、それは何かを失うことではないのだ。大切なものはずっと、私達の心の中にある。

【 講評 】

皆さん、大変立派な発表だったと思います。簡単に講評を述べさせていただきます。

最初の松山さん。分析、目的、手段、提案と、自分の内面を冷静に見ていました。未来に向かう力強さのようなものを感じました。

二人目の五十洲さん。調べたことがすごく良かったのだと思います。それがきっかけで、本との出会いがあり、自分の将来を描くところまで自分を高めていました。

三番目の工藤さんですが、自分の弱い部分の話をするのは勇気が要ることだと思います。その分だけ、真摯に向かい合っているんだなと思いました。

四番目の宮古さんですが、コロナ禍の中での親友とのすれ違い。つらいことだったと思いますが、だからこそ親友とは何か、一緒にいる人たちの大切さに気がついたところがすごく良かったと思います。

石橋さん。「どぶ」にはまったときに自分の成長が始まっていく。困難を避けるのではなくて、困難の意味を考えて立ち向かっていく。よくそこまで自分を成長させられたなと思い、大変感心しました。

それから六番目の木村さん。えんぶりに対する憧れ、やることになった喜び、不安、焦り。心の動きがよく伝わってきました。そして、人と人をつなぐというえんぶりの本質を見つけることができて、そのために続けていくという決心に大変勇気をいただきました。

それから大畑さん。二つの町の間で揺れる気持ちがよく伝わってきました。「大切なことはたくさんある」。これは、価値観の多様性を認めていくという非常に大事なことに繋がっている、そういう発見だったと思います。

そして最後。横岡さんです。大切な人を大切にするということはどういうことか。上辺だけの、当たり障りのない関係でいることではない、自分をさらけ出し、相手を正面から受け止める。それは家族にも、友達にも、仲間にも言えることだと思います。

うまくいかないことや、立ちはだかる壁を相手だとか環境のせいにはせずに、自分の問題として取り上げていたのが、この８人に共通していたことだと思います。自分を変える、あるいは自分が生まれ変わることによって乗り越えることができました。

みなさん、「インサイドアウト」という言葉を知っていますか。「インサイド」は自分で、「アウト」は相手です。うまくいかないことがあると、私たちはアウトの方、つまり周りのせいにしてしまいがちです。例えば、勉強ができないのは先生のせいとか、チームが勝てないのは良いメンバーがいないからだなど。でも、それでは前に進めません。自分はどうだったのだろうと問いかけてみてください。そうすると、見方が変わってきます。アウトからではなく、先にインサイドの方から考える。他人や環境を変えることは難しいし無理がありますが、自分のことは自分で変えられます。今日の８人の皆さんは、そのことを私たちに教えてくださいました。

発表した皆さん、この発表会に参加した田名部中学校の皆さん。皆さんの将来を、私たちは見守っていきたいと思います。今日は、感動と勇気をありがとうございました。

青少年育成青森県民会議
青少年専門指導員　　坂本　徹

第４２回「青森県少年の主張大会」実施要綱

１　趣　　旨　　少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められている。そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切である。

　未来に向けての夢や希望、社会との関わりで感じていること、心に響いた出来事から生じた思いなどを中学生が発表することにより、自分の生き方や社会との関係を考えるとともに、同世代や大人の、青少年に対する理解と関心を深めることを願い実施する。

２　開催日時　　令和２年９月１８日（金）　１３：３０～１５：３０

３　主　　催　　青少年育成青森県民会議、独立行政法人国立青少年教育振興機構

４　後　　援　　青森県、青森県教育委員会、むつ市教育委員会、青森県中学校長会、青森県私立中学高等学校長協会、青森県ＰＴＡ連合会

５　開催場所　　むつ市立田名部中学校　体育館
（むつ市緑町２２－８　　電話　０１７５－２２－１９３０）

６　実施方法　　所定の内容での少年の主張を県内中学生から募集し、原稿審査で選考された８名による主張発表を行う。

７　内　　容　　（１）開会
（２）主張発表
（３）審査
（４）結果発表及び表彰
（５）閉会

８　表　　彰　　主張発表を行った８名の中から最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞５名を選考し、賞状と記念品を贈る。

９　そ の 他　　最優秀賞を受賞した者は「少年の主張全国大会」（以下「全国大会」という。）出場候補者として推薦され、審査委員会による審査の結果、北海道・東北ブロック代表（２名）として選考された場合は、全国大会に出場する。

講　演

「若者よ“ご縁”をつかめ！」

フリーリポーター
中島　美華　氏

田名部中学校の皆さん、こんにちは。元気な挨拶、ありがとうございます。体育館のステージからお話します。フリーランスのリポーターの中島美華と申します。私の職業はフリーランスのリポーターです。なので、実際現場に行って、現場を見て、それを原稿がなくとも喋って伝える。一番私が中学校の時に苦手としていたことを、今職業としてやっています。だから、今日発表した皆さん。私が中学校のときは全然、恥ずかしくて緊張して、こんな人前で喋るだなんてできない！と思って顔真っ赤にしていたタイプなので、素晴らしいなあと思って聴かせていただいたのですが、なにぶん、私の仕事はリポーターですから、喋ること、そしてそれ以上に、お話を聞くことが本職です。

なので、体育館のステージを下りまして、今日の発表を終えて、すっかりもう、今日は出番がないだろうと思っていた８人の皆さんに、本番を終えられた感想をちょっと聞いてみようと思います。

（主張発表者８名にインタビュー）

「少年の主張大会」は毎年開催しているけど、青森県のいろんな場所で開催していて、今年たまたまむつ市。そして今年、この田名部中学校での開催に決まった。だからこそいま、皆さんは、この生の声、生の言葉、生の意見を聞くことができた。ほんとよかったねえ、って私は思います。

今日皆さんと私が話したいことはこれです。本日の演題「若者よ“ご縁”をつかめ！」。さて、この演題の「若者」に当てはまると思う皆さんは、はい、手を挙げて。

ありがとうございます。１年生、３年生のクラスの皆さん。全員手を挙げていただけたでしょうか。２年生の一部は若干遠慮していました。確かにあなたたちより若い人もいますけど、社会全体から見れば中学生は全員「若者」です。みんな、若者です。そして、言わせてもらうと、人間は生きている中で、今日が一番若者です。明日になれば全員一日歳取ります。だからこそ、大人の皆さんも、生きてる中で今日が一番若いんです。その「若者」の、今日は田名部中学校の、そして発表してくれた皆さんにお伝えしたい。“ご縁”をつかめ。さあ、「ご縁」とは何でしょう。考えて下さい。

（参加者生徒にインタビュー）
生徒：「えっと、この学級に出会えたことがご縁だと思います。」

今日皆さんと話をしたかったのはこの「“ご縁”をつかめ！」です。つかんでますか？ってことです。私たちは、ご縁だらけの中で生きています。出会うもの、聞くもの、見るもの、全部が自分達のご縁です。もう、つかみきれないほどのご縁です。その中で、自分でアンテナを立てて、「あ、これが好き！」「あ、これに興味がある！」「うわあ、これいいな！」って、それはご縁かなって気づくかもしれません。

でも、いっぱいご縁があって、そのご縁をつかむのは色々あるんだよっていうことを、みんなよりちょっと長く生きて、リポーターというお仕事をしている私だからこそということで伝えさせていただくと、三つあります。

一つめ。さっきも言っちゃったけど、もう、自分たちの周りはご縁であふれている。ご縁であふれている。

二つめ。「ご縁」と聞くと、いいこと、幸せなこと、嬉しいこと、それを思い浮かべがちだけれども、実は、大変なこと、苦しいこと、どうしようもない気持ちになる、それでさえも自分にとってご縁とすることもできるということ。今日の話を聞いて、大変な思いをしたけれども、その先に答えを見つけた。そんなお話もありました。自分の壁を乗り越えるという試練とのご縁。その先に自分が進めるかどうか。それも自分にとっての一つのご縁なんじゃないかなと、私はそう思います。

そして三つめ。共通のご縁の人が、みんなの周りにはいっぱいいます。ということです。

いいこと言ってくれたもんね、最後に。「このクラスに出会えたこと」。そう、同じクラス。最初に言ってくれたね。「この時代に生まれたこと」。同じ時代に生まれて、同じ時代に過ごして、同じ学校に通って、同じ地域に住んで。今、中学校という大切な時期を同じ田名部中学校というところで過ごしている。これが、とても実は大切な自分の人生のご縁なんだということ、私は大人になってから気づきました。今少しだけ気づいて、これからみんなが大きくなれば、絶対それがみなさんの人生の財産になります。同じむつで、この中学という時代を過ごす。それもそれも、みなさんにとって大切なご縁です。

さあ、お時間も限られてきたので最後に一曲。私、実は歌手もしていて、自分で詞を書いたり、メロディーを作ったり、歌で言葉を届けることもしているのですが、自分で作詞作曲した曲のショートバージョンを歌います。では、お願いします。「この街と」。

今日の田名部中学校とのご縁に、私の感謝の気持ちを込めて、田名部中学校１年生、２年生、３年生の皆さんに「この街と」届けました。

この街と

星空が薄れて　朝日を待つばかりの街
いつもとおんなじ　営みの繰り返し
変わることを求めた頃　変わらないことにいらだち
失ったものに気付いた時　残せるもの探し始めた

歳を重ねる毎に　膨らむ　この想い

胸を張って言うよ　この街が大好き
いい所も悪い所も　全部ぜんぶ
君に伝えたい　この街が大好き
春も夏も秋も冬も　全部ぜんぶ

僕らに出来ること　君につなげること
明日につなげることを　まだ手探りだけど

中島　美華／作詞・作曲～Ｂ－１グランプリ公式ソング

ここにいる全員が、この街とのご縁があります。自分自身の回りにあるご縁、自分でピンときたもの、しっかりつかんで、どうか自分自身の未来をつくっていってください。

今日はどうもありがとうございました。

第42回　少年の主張全国大会～わたしの主張2020～

内閣府総理大臣賞

言葉を紡ぐ

鹿児島県　霧島市立横川中学校　３年　池島　音羽

「音羽ってさ、最近調子乗ってるよね。偉そうにさ。まじ、ウザい。」
それは、突然のことだった。冬が、静かに足音を忍ばせながら近づいてきたあの日。放課後の教室に冷たい風が吹き抜けた。息ができなかった。ただ、茫然と立ち尽くすしか。心の奥を鋭い刃物でえぐられる。無理に笑おうとすると、頬が引きつった。私、今、どんな顔してるんだろう。真っ白な世界にただ一人取り残された。頭の中に浮かぶのは、疑問だらけ。ついさっきまで、仲良く話してたよね。どうして。どうして私が。私、そんなに調子に乗ってたかな・・何か、悪いことしたかな。

その日からすべてが変わった。ひそひそ話をする友人の姿を見ては、その場から逃げ出した。怖かったから。きっと自分のことをいってるんだろうって思った。そそくさと教室を出る私の背中に浴びせられた言葉。
「ほんと何なのけ。ウザいんだけど。」

誰かに相談したくてもできなかった。相談したら、また何かいわれるんじゃないかとおびえる日々。ベッドに横たわって意味もなく、天井を眺めた。頭の中の何かがプツッと切れた。気づいたら側に母がいて、私はすべてを打ち明けた。瞬きもせずに私の話を聞く大きな瞳に泣きじゃくる私の姿が映っていた。
「今まで辛かったね。あんたはすぐに一人で抱え込む癖があるから、誰にも相談できなかったんでしょ。今、お母さんに言った気持ちをほんの少しでもいいから相手の子に伝えてごらん。何も変わらなかったら、また、お母さんのところに戻ってきなさい。」
夕飯に出されたお味噌汁を一口すすると、心の中に溜まっていた何かがふっと抜けていった。久しぶりに感じたこの暖かさ。でも、どうやって伝えたらいいの。直接、言える勇気なんて私にはない。だったら、どんな形であれ、自分の気持ちを伝えなきゃ。だって、私には帰って来られる場所があるんだから。

その夜、私はスマホを握りしめた。LINE を開き、ずいぶんと更新されていない画面を見つめ、自分の思いをしたためた。何度も何度も文字を打ち直した。私が悪いのなら何がいけなかったのかを教えてほしいということ。陰で言われるのはとても辛いということ・・。送信ボタンを押す手が震え、どれだけの時間が経っただろう。これがきっかけで何かが変わるというんだろうか。

翌朝、既読のサインは付いたが、返信はなかった。学校についてもいつもと変わらない景色がそこにあった。
「ごめん。」背中越しに聞こえた言葉。それは突然だった。伝わったんだ。少しずつ、私の世界に色が戻ってきた。
「何か、気に入らないことがあったら、教えてね。」
途切れ途切れの私の言葉。

スティーブ・ジョブズ氏は「想いを形にして、想いを言葉にして、想いを伝達する。いくら素晴らしいものを作っても伝えなければないのと同じ。」と語る。SNS は諸刃の剣。時に人を傷つけるが、人を救うことだってある。世の中は情報化社会だ。これから先も、私たちは情報の渦の中で生き抜くことになる。何を学び、どんな力を身につけなければならないか。今、文科省が勧める「GIGA スクール構想。」この目的は、一人一台のコンピューターと、一人一人の個性に合わせた学習の実現だと言われている。多くの情報を活用する力が私たちに求められているのだ。だが、その基盤にあるものは何だろう。どれだけ、情報化の波が押しよせようとも、人間が人間としてあるためには、想いを言葉に紡ぎ、相手に伝えることではないか。そして、人と人とがつながることで、新しい時代を築けるのではないか。帰宅した私を母が笑顔で迎えた。
「何か食べたいものある。」
私は迷わず答えた。
「お味噌汁。飲みたい。」

文部科学大臣賞

静から動へ

栃木県　大田原市立金田北中学校　３年　荒井　千恵理

緩急のあるなめらかな運筆。白い紙の上に伸び伸びと広がっていく墨の色。
「私もやってみたい！」

私が書道と出会ったのは、三歳の時でした。その日から十一年、私は祖母の教場で一生徒として書を学んできました。百枚以上書いても納得いかず、先生である祖母と意見が合わず、泣きながら次の紙を下敷きにのせたこと。数えきれない失敗と挫折を繰り返して、一つの作品が仕上がったときの達成感。それらの経験は今、私の自信であり、誇りでもあります。

中学生になって、新しいことにチャレンジしようと思った私は、剣道部に入りました。剣道には、長年続けてきた書道と通じるものがあると感じたからです。剣道場の張り詰めた空気。面の中で反響する自分の呼吸と、心臓の鼓動の音。そして、静から動への瞬間的な移動。迷いや恐れを断ち切り、今と決めて踏み出す一歩は、半紙に筆の穂先を落とす瞬間に似ています。どちらも強く、しなやかな心が大切です。そして、剣道との出会いによっても、私はまた一つ成長することができたと思っています。

それまでの私は、自分が思う正解にこだわり、自分が思う美しさや理想から外れたものを受け入れられないところがありました。それは自分が信じ、身につけたやり方こそが真に正しいものであってほしいという願いでもありました。しかし、剣道で、他の流派の先生から教えを受け、様々な個性を持つ選手と大会などで交流するうちに、それぞれの正しさや美しさがあるのだと思うようになったのです。そして、かたくなだった私の心は徐々に変化していきました。

思い返せば書道でも、あきらかに自分とは異なる筆づかいの作品が高い評価を受けていることに、納得がいかないと感じることがありました。自分の今までのやり方が絶対的なものであるという思い込みを捨てること。そういうしなやかさを手に入れることで、私の書道と剣道は、さらに豊かになっていくのだと気がついたのです。

中学校最後の大会に向けて、いよいよ本腰を入れようとしていたときです。全国的な新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、学校は休校になりました。部活動の大会は、春季・総体ともに中止。体育祭も中止となり、修学旅行は日帰りとなりました。休校中は家から出ることすら気が引けて、当たり前と思っていたことが次々と崩れていく日々を、現実感を持てないままに過ごしていました。

六月になって自粛が解除され、もとの生活が帰ってきたかのように思われたのは束の間で、私たちは今、感染症の第二波のさなかにいます。でも、休校や休業にするのではなく、三密を避けながらの暮らしを送っています。経済が破綻しないように、全面自粛ではなく、それぞれの判断で行動する。言うのは簡単ですが、非常に難しいことです。

私は、今のこの時を、静と動の「静」の時間として過ごすべきだと考えます。それは、ただ静かに禍をやり過ごす時間ではありません。書道でも剣道でも、「静」の時間に、己を見つめます。そして相手を見つめます。そこから、自分にできる最善の手を考え、動き出す準備をするのです。今この状況で、急いでもとの暮らしに戻すことを目標にするのが最善とは思えません。誰も経験したことがない出来事が起きているのですから、国や政治家の提案がうまくいかないことをただ責めるのではなく、失敗や間違いから学んでいかなければなりません。誰かがどうにかしてくれるのを静かに待つだけでなく、持続可能な新しい暮らし方を、私たちも考えなくてはならないのです。学校での過ごし方、家に帰ってからの習慣、それを考え、選び、実際に行動するのは私たち自身だからです。

私は将来、書道の指導者になりたいと考えています。生徒の背中から手に手を添えて、運筆を教えるようなやり方は、これからはもうできないのかもしれません。でも伝えたいことは変わりありません。どこまでも広く自由で、だからこそ厳しく美しい書の道を、どう伝えていくか。やり方は一つではないのです。自分にできることを、自分らしく、考えて実践していきます。

国立青少年教育振興機構理事長賞

目には見えないもの

愛知県　豊田市立末野原中学校　３年　戸塚　優羽

「吃音症」というものを、どれくらいの人が知っているでしょうか。

吃音症とは、言葉がつまったり、なめらかに話せなかったりする発達障害です。わたしは、その吃音症。私が、その言葉を知ったのは小学校六年生のときでした。

六年生の学芸会、人前に出ることが好きな私は、やりたいと思っていた台詞の多い役になりました。頭の中で何度も台詞を繰り返し、イメージもばっちりで練習を迎えました。しかし、ある特定の言葉を発しようとすると、なぜかつっかえてしまい、うまく話せないことに気づきました。「あなた」「永遠」といった言葉の始めにア行がくる言葉が発音しづらいのです。頭では「言え！」という信号を出していても、言葉がのどを通らない。つっかえる度に、周りからは白い目で見られる。「言え！」と必死になればなるほど、言葉が出なくなる悪循環。そんな私に、クラスの男子は「記憶喪失」とからかってきました。違うのに。台詞はちゃんと覚えているのに。あなた達よりずっと練習してるのに！そう言いたくても、「あなた」の「あ」の字が邪魔して上手く言えない。悔しさ、情けなさ、そして、学芸会を台無しにしてしまうのではないかという不安でいっぱいになり、家で泣いていました。

そんな私を見て、母が子ども発達センターに連れて行ってくれました。そこで診断された名前が吃音症。聞き慣れない言葉に、より不安が大きくなりました。言語聴覚士の先生が、「吃音も個性」。そう言いました。でもその言葉はそのときの私にはあまり響きませんでした。そんな私の悩みを、先生は根気よく聞いてくれました。少しずつではありますが、吃音に対する不安、辛さが消えていきました。「なんだ、私。このままでもいいんだ。」と思えました。吃音の不安を取り除く説明をしてくれたことはもちろんですが、なにより、私の悩みを根気よく聞いてくれる。そんなことで、こんなに心は軽くなる。この体験で、誰かが悩みを聞いてくれることの大切さを知りました。

学芸会本番、相変わらず私のア行はうまく発音できませんでした。感動的な見せ場のシーンでも、何度もつっかえてしまいました。悔しかった。だけど終わった後に、周りの人から「つまっていても、一生懸命に言っている姿が良かった。」と言ってもらえました。このとき、初めて先生が言った「吃音も個性」の意味がわかった気がしました。

今でも私の吃音症は相変わらずです。ア行の発音は苦手だし、ふとした言葉でもつまってしまう。国語で音読が当たると少し緊張します。しかし、そんな私は今、生徒会長という立場になりました。生徒会長あいさつなどの人前で話す機会も増えました。でも、不思議と不安はありません。いつでも相談できる人が、私の周りにはたくさんいます。何より、「吃音症でうまく話せない生徒会長でもいいじゃない。吃音は個性なんだから。」と背中を押す私がいます。

吃音症に限らず、人が抱えている悩みは目に見えないのかもしれません。もしかしたら、笑っている様に見えた誰かの心は、辛く、不安でいっぱいなのかもしれません。どんな小さいことでも良い。友達の様子がいつもと違ったら「大丈夫？」と声をかける。そんな些細なことが、相手にしたら大きな支えになるのかもしれない。

悩みは目には見えない。そして、それを支える手も、もしかしたら目には見えないものなのかもしれない。だけど、目には見えなくとも、悩みも支えも、そこにはある。目には見えないものだからこそ、それに気がつける自分でありたい。今まで私を支えてくれた感謝を胸に、吃音症である自分を誇れるように。

審査委員会委員長賞

人生のかけがえのない財産について

静岡県　浜松市立北浜中学校　３年　村松　グルン　良智美

「もう少し肩の力を抜いていいんだよ。」

ヒマラヤ山脈からこぼれ出る朝日が私に語りかけました。

中三目前の春、家族そろって父の国、ネパールに行くことになりました。しかし、行って何になるのか。正直気が進みませんでした。その頃、私は部活の先生との意見のくい違い、人間関係、将来についてなど様々な悩みを持っていました。何をやっても上手くいかない、人の悪い所ばかりが目につく。そんな自分をとても情けなく思っていたのです。しかし、そんな時母は私にこう言いました。

「リフレッシュも大事。ネパールでの旅はらっちのかけがえのない財産になるはず。」

「かけがえのない財産」。その言葉は、私にとってとても特別な言葉に聞こえました。するとネパールに行ってみたい、と思うようになりました。

私の父の実家は、ヒマラヤ山脈の標高二千メートルのチャリス村というところにあります。首都カトマンズから車で一日、さらに歩いて二日かかります。途中で宿泊する寝床は石のように硬く、ネズミまで出ました。もちろん、テレビもスマホもゲームもありません。私は、改めて日本の快適さを実感しました。

長い時間山を登り続け、疲れ果てていた私達。村の人達はそんな私達を喜んでむかえてくれました。盛大なおもてなしはとても心温まるものでした。

村のみんなは、とてもおおらかで親切です。何をするにも「ビスタリ、ビスタリ。」（ゆっくり、ゆっくり。）と私に声をかけてくれます。日本で「早くしなさい。」と言われ続けた私にとって、それはとても新鮮なことでした。

村の子供達は、学校のあるとき以外は毎日朝から暗くなるまでバレーボールなどをして遊んでいます。私はそれに加わるのがとても好きになりました。そして、その光景を畑仕事を終えた大人達がいつも優しく見守ってくれていました。そんな毎日の中で、ああ、スマホやゲームがなくても楽しいことっていっぱいあるんだ、と思わずにはいられませんでした。遊び終わるといつも服は泥だらけ。ネパールに行く前の私だったら、

「泥だらけになって遊ぶなんて。」

と言うに違いありません。日本では、家に帰るとまず先にスマホをいじる生活だったからです。しかし、ネパールでの私は泥だらけになっても幸せを感じることができました。

村の人達はいつも一日の楽しみを見つけてきては、夕食でそれは楽しそうに話します。「ロバの赤ちゃんが生まれた。」「今年は豊作だ。」楽しい話は、みんなを笑顔にします。私は日本で夕食の時間、マイナスな話をすることが多くありました。しかし、そんな話をするほど自分の気持ちは落ち込んでいきます。村の人達は人の悪口などは口に出しません。楽しく、笑顔になる話ばかりします。私は幸せの秘けつはきっとそこにあると思います。

夜、ヒマラヤ山脈に広がる満天の星空。本当に来てよかった、と心から思いました。

お別れの日、私は村のおじさん達と握手をしました。ゴツゴツとしたかたい手。そこには心の豊かさと、優しさがあふれていました。みんな泣いてお別れを悲しんでくれ、私の心もギュッとしめつけられました。

ネパールの人達は日本の私達の暮らしと真反対の日々を送っています。しかし、ヒマラヤ山脈の壮大な景色と共に幸せに暮らしていました。

私はネパールに行く前まで、自分のことは棚に上げ、他人のことを否定してばかりいました。今思うと、そこには幸せという感情はなかったのではないかと思います。

広い視野を持って世界をながめること。きっとそこには色々な人生の生き方があるはずです。ネパールの山々が教えてくれました。小さな人間関係にとらわれ、負の感情にさいなまれていたこれまでの自分。しかし、世界には日本の便利な生活では計りきれない事がらがあふれています。

「知らないこと」を知ろうとする姿勢。それが人生のかけがえのない財産になるのだと私は思います。幸せの価値は人それぞれ。幸せの価値を決めるのは自分自身。私達には無限の可能性があります。

人生のかけがえのない財産。「ビスタリ、ビスタリ。」見つけていきます。

審査委員会委員長賞

「らしさ」を輝かせる

島根県　松江市立宍道中学校　３年　武田　はぐみ

「それ、すごくかわいい。」

そう言って、うれしそうに母が見ているのは私の絵でした。私は自分の絵が好きではありませんでした。脳性麻痺という障がいのため、手足が動かしづらく、頭の中にきれいな完成図があっても、どうしても線がゆがんでしまうのです。学校の授業で絵を描く時も、上手く描ける気がしませんでした。真っ白なままの画用紙と、いつまでも見つめ合っていたのを覚えています。母が眺めている絵は、当時小学六年生だった私が中学校の部活動体験で描いたものでした。私は自分の絵を見て、「また、うまく描けなかったな。」と落ち込んでいました。ところが母は、その絵を見るなり、「すごくかわいい。」と言うのです。それ以上ないほどの笑顔でよく絵を見るのです。私は何だか恥ずかしくなりました。同時にこの絵のどこがいいのだろうと不思議に思いました。それから母は、

「はぐの絵、イベントに出してみない？」

と言うのです。母はものづくりの仕事をしていて、時々イベントに出店しています。そこで、母の作品の隣に私の絵を出してみないかというアイデアでした。私は、思いもよらない提案に驚きました。でも、とてもうれしかったです。その日から私は絵を描き始めました。しかし、どの絵にも自信はありませんでした。いつも、これでいいのだろうかと思ってしまうのです。よく分からない不安でいっぱいでした。そんな胸の内は明かさず、あのうれしそうな母の顔を見ることで、自信のなさをごまかしていたのです。

そして、イベント当日。個性あふれる作品が至る所に並んでいました。他の人の作品を見て、すごいなあと思うばかりの私。でも、気がつけば目の前に、私の絵を幸せそうに見てくれる人や、手に取ってくれる人がいたのです。私はその時、初めて気がつきました。絵を上手に描こうとする必要はない。自分らしく描けばいいんだということに。私はそれまで、絵は上手に描かなければいけないものだと思い込んでいました。でも、私のゆがんだ線や、いびつな形でできた絵にも魅力やよさがあると知りました。それなら、たとえうまく描けなくてもいい。私の描きたい絵を私らしく描こうと思ったのです。

あれから三年。私は絵を描き続けています。それは、絵を描くことが心の底から楽しいと感じるようになったからです。自分のそのままの絵を好きになったからです。最近は、油絵の具を使って人の顔を描くことが多くなりました。楽しくて、私にしかないイメージを表現できる「絵」という世界にわくわくしています。私は、自分の絵が好きではありませんでした。でも、母やお客さんのお陰で、その絵の中に、「私らしさ」があると知りました。自分と誰かを比べて、下を向いているあなたに伝えたい。あなた自身の好きではないところにも、「あなたらしさ」があります。上手にできないと悔やまないで。その「上手にできない。」の中にあるあなたらしさに気づいてほしい。そこにまだ知らない素晴らしいあなたがいるかも知れません。

五月末、黒人男性が白人の警察官に首を絞められ亡くなるという痛ましい事件がありました。個性の尊重と言いながら、結局は優劣にとらわれがちな世の中はいつ変わるのでしょうか。外見や国籍など様々な違いを超えて認め合い、互いに尊重し合える社会を実現する。そのためには未来を担う私たちが変わるべきではないでしょうか。まずは自分で自分を認めることが大切だと思います。そうすれば、自然と周りの人のことも認められるようになると思うのです。

私はこれからも、私らしく生きていくために絵を描きます。自分を嫌いになっていく人生より、好きになっていく人生を紡いでいきたい。そこで見つけた「らしさ」を輝かすことができる人でありたいです。「らしさを輝かせる」これが今の、そしてこれからの私のテーマです。

審査委員会委員長賞

你好ニッポン

熊本県　熊本市立出水南中学校　３年　大田　直人

一人の少年が、今持っているものをすべて手放して、遠い国で自分の可能性を探ることを決心しました。その少年は、僕です。

僕は中国人と日本人のハーフで十四年間北京で生活していました。日本語は、月に一度、日中ハーフ子ども交流会「ニッポン塾」で勉強しました。僕は、小さい頃から日本の高校か大学で学びたいと考えていました。そこで、教育制度の問題と将来のことを考え、中学三年生から日本の中学校に通うことになり、二年生の一月から体験入学が始まったのです。

日本へ向かう飛行機の中、僕は不安でいっぱいでした。「もうあと戻りはできない。何があっても乗り越えていくしかない。」そう自分に言い聞かせました。ところが、空港を出ると見えたのは、美しい道路や街並み。「なんてすがすがしいんだ！」僕は、澄んだ空気を思いっきり吸い込みました。

緊張しながら、二年一組での生活が始まりました。クラスメイトに話しかけてもらうととても嬉しいのですが、自分から話しかけることは難しく、ただ笑顔を返すことしかできません。早く日本語を上手に話せるようになりたい、そう思いました。

日本に来て驚いたことは、豊富な学習内容です。中国では、技術家庭科の授業はなかったので、初めての調理実習、メニューは、熊本の郷土料理「だご汁」。もし、北京だったら、「北京ダック」を作っていたのかなあ。そんなことを考えながら、だんごをこねました。初めての「だご汁」は、だしの香りがよく、とてもおいしかったです。

体験入学が始まって、一か月目の期末テスト。僕にとっては、難しいテストです。教科書を何度も読み、僕の中にある日本のＤＮＡをすべて使って、解答欄をうめました。結果はともかく、自分のベストを尽くすことはできたと思います。中国では、テストの後、一人一人の順位が公開され、競争しながら勉強する環境が作られています。成績がトップの人には賞状が与えられ、みんなに勉強法を教えるのです。僕もそのおかげで競争心が強くなり、成績が上がりました。一方、日本はテストの成績だけではなく、いろいろな技能や体験も学べて、将来生きていくための学習なのだと感じています。

現在は、インターネットの普及で、世界中の人々とつながる時代です。僕は今でも、中国の友達と連絡を取り合い、週末は一緒にオンラインゲームを楽しんでいます。別れの日、涙を浮かべて送り出してくれた彼らとの日々を、僕は生涯忘れることはありません。自分を支えてくれ、強くしてくれる友達という存在を、日本でもたくさん増やしていきたいです。

僕は、小さい頃から日本のアニメが好きで、そこからも日本語を勉強していました。日本の文化は全世界に広がり、中国の友達にも、日本のアニメや映画、音楽が好きな人はたくさんいます。日本と中国は、古くから関わりがとても深く、遣隋使より昔から、多くの学者や僧侶が、医学や文学や仏教などを日本に伝えました。日本と中国は戦争をしてしまった時代もありましたが、今では、さまざまな分野で友好な関係を築いて、協力し合っています。

中国には、『吃得苦中苦、方為人上人』という古い言葉があります。人より苦労してこそ、人の上に立つことができるという意味です。僕の未来は、光が差す明るい道かもしれない。でこぼこで困難だらけの苦しい道かもしれない。でも、僕が一つだけ心に決めているのは、大好きな日本と中国、二つの国に役立てる人になりたいということです。この二つの国は、ときに微妙な関係になることもあります。でも、二つの国の良さを知っている僕だからこそできることを探し、僕だけの道を胸を張って進んでいきたいです。

～育てよう　未来を見つめる　かがやく瞳～

青少年育成青森県民会議

〒030-8570

青森市長島 1-1-1　青森県青少年・男女共同参画課内

TEL : 017-734-9224

FAX : 017-734-8050

E-mail : seishonen@pref.aomori.lg.jp